

增鏡

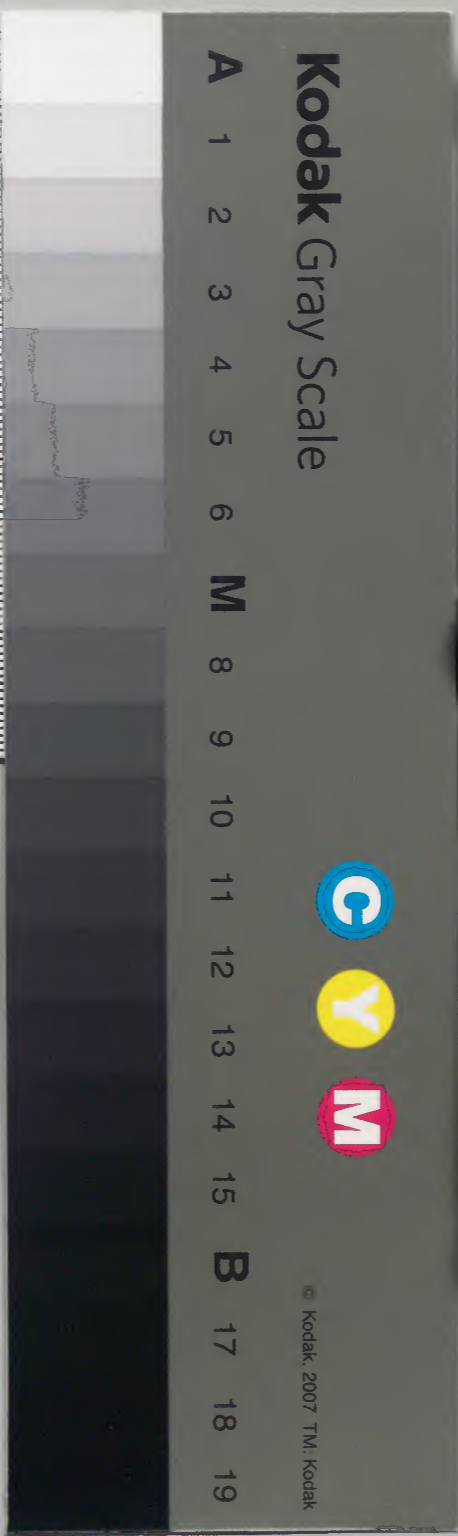
和 喜
10412 號

和 書 門			
一	一	一	一
冊	架	函	號
10	1	15	12

內 閣 文 庫	
三	一
八	〇
函	四
四	二
架	冊
138	38

內 閣 文 庫	
番 號	和 10412
冊 數	10 (8)
函 號	138 38

10412



うやの由信仁和寺乃禅助僧正と御師範よてこの此
寛平のむしきもやあやすしむ密宗よとてさそせし
婦ひきおれ六月よの飛山教よとて法心法種よとせ給よ
由らうむらうてのらる大方女房ハ成のうまうて
男トりとりては巻あどとまものせよるあづはは
まの取のつるも取物被よとてわつりまひのいとあや
かすきせんちりききめてぞお女院ハ成りてくたは
られ今林教よとて法華ととをりてにをこててはせ
させ給よの今林ち山乃准后のむらとせよあ
かり格義門院此成りてて梵字ぬん被給よ
の此成りてて小法教經一字三礼よとて被給ひ

て格取院よとて供養せしむる僧正御師有女
院の由信も今林よ法心法種よとてまてを成りて
まうて被給よまげは月ごとく女白りよはのあやす
ありおかりハまうて程のうかりまてあて八月ま
まうてあつてより由たうあまのあつておとす
とてさゆく此成りて又檀越神愛深文く此秘
法よとて諸法乃奉幣神馬あやられりては成りて
けきとてまげあまうてよあ被給ひとて女二日由
まはあまうて世のひきまてんかあて馬車け
まらうてあまうてまてんかあてまらうてまてん
まてんかあてまてんかあてまらうてまてんかあ

もいばあよそぞありも多。廣義門院もたのどく
國母の位ららよそよろけめてたくり義院のうへえん
りり和子の乃よはなまもろうりみくわんしやせ
むらびつちかかおがされかども正應の撰者と
の奉ゆつづつひごもありき。撰集もなかり
一つむいごも地ねうおびされく
我世一はあめお和子乃はふる
じよ一かかかあひよのこさん
なやう中あつたも一あ一きやう一と。かきい
そにやう勢方給ひく。乃乃大納言もいさうわ
て美勢のよもあひせうごもあつた。いかにいせ
て美勢のよもあひせうごもあつた。いかにいせ

三月廿八日葵せり。教の五葉集とごうのいなるいなる
大納言いある氏の大納言のそと。いなる教右と美勢
かきい一うみなりあつた。義院の位ははえろ人
よくかかか撰者よもあひせうごもあつた。いかにいせ
くあつた。いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。
みよ中あつた。いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。
いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。
きくじう乃新成大納言あもはらり給うた。いかにいせ。
河の人アたりあつた。いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。
かきい一かかかとらや。正和も二とあつた。いかにいせ。
御奉えとげあんとあつた。いかにいせ。いかにいせ。いかにいせ。

よてのこころざしのしんぞん
美聖山後教震殿

のころ軒の梅はうりふたうりた夕まへとほつて

てゆよたぐまうつと娘きまふは花よの香を

かたよまほ花さりやうつとて

ねるうち常のまきよめいも

はねうち南教のはくしよううちまきよ

花はまふ思ひつとんまきとるま

あつねるもよとめうち

はゆみれはつちまはつちのらん乃本院とひつち持の院

茶よすまを給すまうちり清みれうちあてね

うちまをばまひつちのうちのうちまをばまひつち

をぬくそとるくまひと娘給よとねりやうあ

押わりさ海がなりはつちのちまをばまひつち

まひつちをばまひつちのうちのうちまをばまひつち

くうちまをばまひつちのうちのうちまをばまひつち

うちのうちまをばまひつちのうちのうちまをばまひつち

うちのうちまをばまひつちのうちのうちまをばまひつち

廣義門院の御殿の一の住子ははあぢは坊よと

あぢは坊よとあぢは坊よとあぢは坊よとあぢは坊よと

あぢは坊よとあぢは坊よとあぢは坊よとあぢは坊よと

あぢは坊よとあぢは坊よとあぢは坊よとあぢは坊よと

あぢは坊よとあぢは坊よとあぢは坊よとあぢは坊よと

よろすめで山さたもひつけと

大老も教よまひさう入馬車うまぐるまのきさらこみさげを

成らんてはさしを給ひ多れ

あつたもはらり〜もり〜里ま

あつたもり〜とをさして

今此うゑらやうよりあ園あひん乃入道いんどうに〜

乃末の西女よめ並なみ季き大細言おほこゑ乃むらうは服はくよもの給

よとよのむ〜もらん給ひ〜かされは思

ひ〜そ〜をらん〜あ〜は〜し〜

は〜の女侍おんなざむらい乃宣旨のせんじな〜ま〜は〜あ〜

て八月はつげつ乃宿しゆくらあま〜入道いんどうの〜らひらと

よのあ〜と〜とね〜

つねはり幸あり。八月十五日乃夜名とえ〜

下と小老をそ〜を教あ〜わ〜か〜

て〜れ〜と〜れや〜あ〜お〜の乃永福ながふくの屋や

里さと乃宿しゆくは〜の法はふ消息しよきや〜

あ〜と〜と〜月もひらりそ〜

秋のみ山をわ〜ひ〜う〜

は〜と〜の〜と〜の〜せ〜ゆ〜

む〜か〜の〜の月つきのけ〜

あ〜ひ〜や〜あ〜

清門しみかど乃おが〜は服はくの〜あ〜ま〜を〜

猶も西母雅后之院号ありて後天門院とぞまきと経
め心も海河のまやりのみそとせし事とぞとて一げう
まうの件内よは万里少海大納言入道師重とのひ一女
大納言乃典侍とてのみ下うとせしめく人ありて海河
まき乃持太主とせしむるは君の志のむくもそのれ
けらよやうは女おたえらうせぬとてくもあたらうひ
後治承二三月よりあまの御心あくとせし人とおのりあぬ
まはが魚めが海河とあくとせしとあむすもあむすれま
まきとせしあぬとせしゆたはゆえ乃時あまのまきとせし
ゆがめは海河のまきとせしゆたはゆえ乃時あまのまきとせし
ゆがめは海河のまきとせしゆたはゆえ乃時あまのまきとせし

まれとせしめてのいかに下うとせしは海河くまのひ
まそこのくくろ山庄よあまのし井ぬ花のゆらうは
かり海き浪なうあまの
うた事とて花よは志けくつとあまの
まはあゆ海うじりなるもあまの
まけらるるゆりまのれあまのけくつとあまの
ゆきふ海まのれぬ熱くまのわらうくらうたが
らせ給ふとゆらもあまのじさうくまのけらうとすれんを
まきとせしありかんり
まきとせしえらうとあまのけらうとすれぬを
まきとせしえらうとあまのけらうとすれぬを

この中に大納言あり

平賀の御神より御祈り我々ら

御祈り我々ら

元應二年四月十九日勅撰を奉りしを

續千載と云ふなり。新後撰集と云ふは撰者

のまはかりははた集よりいふは

御まはかりははた集よりいふは

人くははた集よりいふは

元亨八月十八日ありしは

元亨八月十八日ありしは

春日の所林へて教よはる

合あるへては後乃中納言

は題をてまつる教よはる

相雅繼昭副門院の春日

後大納言実教洞院中納言

侍為信女忠定別長あり

と記ありとて安福教へ

後大納言実教洞院中納言

侍為信女忠定別長あり

と記ありとて安福教へ

御方の御入りとぞりてまの御。敏上乃のともを承て
しごふ。勢はひとくとも。つより。右近の陣のおあはれと
と。接洽へて。やまに。月乃のつま。侍いと。なり。まう。
あじゆく。でんのは。やと。敏上乃。まや。と。き。て。日ん。
南。一。お。う。ま。ひ。上。達。教。を。す。れ。て。の。高。榎。よ。せ。あ。り
を。一。あ。て。つ。敏。上。人。を。な。ま。は。し。て。ひ。あ。つ。あ。を。侍。と
えん。さ。り。地。乃。御。船。は。一。せ。と。く。右。右。乃。講。師。き。ま。う。す
け。る。そ。の。せ。く。御。船。は。な。れ。と。ま。の。つ。ま。ゆ。き。う。さ。り。
き。こ。と。う。り。の。えん。よ。あ。ま。あ。う。一。人。く。れ。平。し。く。を
一。に。だ。も。と。と。こ。よ。も。だ。く。ま。う。つ。あ。い。と。つ。を。御。
あ。で。れ。月。あ。い。か。り。り。か。に。地。乃。の。か。ん。よ。ら。り。の。

が。志。あ。ま。秋。乃。あ。り。の。き。ふ。い。と。と。れ。御。を。は。う。
き。月。を。か。う。と。い。ぬ。お。け。ご。ら。う。あ。い。よ。ら。り。う。の。
御。製

あ。の。乃。を。と。と。と。く。御。月。よ。あ。と。な。れ。て
あ。一。と。思。ふ。御。の。あ。う。ひ。り。ま。う。

水。御。一。あ。げ。ま。は。れ。御。景。陽。乃。御。を。ひ。に。は。と。と。う。
あ。行。し。つ。の。み。一。う。か。ん。つ。ま。を。御。一。う。の。あ。い。ぬ。あ。
と。も。お。向。く。ま。と。え。一。か。ど。御。製。乃。御。の。を。と。み。ま。う。
ふ。れ。あ。ま。な。り。ま。う。一。や。あ。く。て。あ。く。一。を。又。く。ま。い。ぬ。
あ。の。あ。ま。元。亨。二。正。月。二。日。御。親。乃。御。幸。地。は。御。の。御。と。
う。と。れ。式。部。卿。乃。乃。一。に。御。家。大。炊。御。門。御。御。御。御。御。

かしてんやとてきまてまつぬ中よゆれはめのや乃吉
の糸大物言定房備たしつ志くれふるそあらぬよ
いふおろくはつるるりなご思ひのうらぶよめてふたよ
ろしひ乃候あしびし法物をらりぬきと又りとの
道といふまひくく物座より物給ひぬ法言と由
よいふまむてきびあそてち右乃樂座乃調よと
そのやまてつら又はつり物給ひ法言とあつま
うらひは古志とひつらりよてちまひまひと志を
むしふゆらまもさるる女房ともはゆふ二車
よ小大物言教うたよよ身のとよふく人のさしと
かり神典侍資前女よあつていひまもむも二車なり

新兵衛中之内侍後よ准后ときよえよたきりよな
ひつとぬと。三乃車にけ侍内侍尾張内侍よりよまは
しつらりあごまて後上達部はあよ着て後は着
まのあふくさうと泰宰相中将陪膳右大侍兼季を
の初来入院地下の舞いあるあつてあれどわわ
つらもやうはつらふわらあつてあつてあつて
え後後のあおほえりてま王とひあ人初教のああが
しつらやうらるり後給ひとあつてあつてあつて
あけあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
賢治おのあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

てはあまのまのしとて後治ふ右大将も節中り又太史理琵琶
大ま大御言等右幸お中將和琴うえ忠宰相御筆筆兼
考の吹くもや拍子大夫居よ清冬忠乃宰相あを
おくゆくよう人のほほ乃者すみのがりていみじく
はえよりなれはく乃安名尊と伊勢の海のかまひ
めてましくまはる海。かごえとてあまをたし清をまを
物まのる。清の御舞のまははくえおの盡よとて清
程あ大夫居よりうまて園白よまをまつおほあは
はらんせよおめてを方よめてはりて清よ唐の赤地
の錦乃御舞よ清琵琶入へまのあそのいらはむじり
教よくくらりよとらてはまははらむらうのくも

あくはやぐもそゆせは給わぬ。法皇をめぐもはれ
た大光寺教のこあり後治くは海とく
世中此事とも奏よまのりはとらまをことら
よはをここの井よのこ入給ふあよとておくく
はゆせばそのなはまは乃大御言あつまははら
おは門よあまの志くはるおつりよとての清清
息をよるを。おわりはらひのあはゆふあわな
てしは世ふこつあまの事かまらり乃幸いらは門
のほのこらもよくはくはせぬあまのこはらあ
これとあまのこははらひはらひあまのあまの兼久
よらあまのこははらひはらひあまのあまの兼久

由よりうへにゆへに上達部などのあるりていふ
かゝる思ひいふのうへにわらわやゆへにいふは
りていふ思ひいふのうへにわらわやゆへにいふ
はるりていふ思ひいふのうへにわらわやゆへに
いふて大納言やゆへにわらわのゆへにいふは
新へく奏じたりとて院乃文殿儀定下りりて
き評定ありとせりていふゆへにありとて世に
きく先と後路と事いふゆへにありとていふ
いふとせりていふゆへにありとていふゆへに
いふはいふゆへにありとていふゆへにありと
ていふゆへにありとていふゆへにありとていふ
ゆへにありとていふゆへにありとていふゆへに

これ月乃より久しゆきい賢人の徳とていふ
いふゆへに女中もいふゆへにありとていふ
上達部教上人二十餘人ものあり。関白教房兼計
兼衣して此帳乃ゆへにありとていふゆへにあり
ゆへにありとていふゆへにありとていふゆへに
也。春宮大進兼侍大納言祖房兼侍中納言氏忠和琴
友宰相中将兼侍中兼侍右兼侍左兼侍中侍光忠
兼侍中侍光忠のいふゆへにありとていふゆへに
ありとていふゆへにありとていふゆへにありと
ていふゆへにありとていふゆへにありとていふ
ゆへにありとていふゆへにありとていふゆへに
ありとていふゆへにありとていふゆへにありと
ていふゆへにありとていふゆへにありとていふ
ゆへにありとていふゆへにありとていふゆへに

かのしるしをよみしにばりてはくまのりて
まじらむとてはくまのりてはくまのりて
—とあがられぬもあはれなり大方
—に院のうらみはくまのりてはくまのりて
はくまのりてはくまのりてはくまのりて
とまじらむとてはくまのりてはくまのりて
はくまのりてはくまのりてはくまのりて
な—の肉体的のあはれなりてはくまのりて
とまじらむとてはくまのりてはくまのりて
まじらむとてはくまのりてはくまのりて
日あかりの程はくまのりてはくまのりて

はくまのりてはくまのりてはくまのりて
まじらむとてはくまのりてはくまのりて
あはれなりてはくまのりてはくまのりて
—とあがられぬもあはれなり大方
—に院のうらみはくまのりてはくまのりて
はくまのりてはくまのりてはくまのりて
とまじらむとてはくまのりてはくまのりて
はくまのりてはくまのりてはくまのりて
な—の肉体的のあはれなりてはくまのりて
とまじらむとてはくまのりてはくまのりて
まじらむとてはくまのりてはくまのりて
日あかりの程はくまのりてはくまのりて

宰相典侍
—とあがられぬもあはれなり大方
—に院のうらみはくまのりてはくまのりて
はくまのりてはくまのりてはくまのりて
とまじらむとてはくまのりてはくまのりて
はくまのりてはくまのりてはくまのりて
な—の肉体的のあはれなりてはくまのりて
とまじらむとてはくまのりてはくまのりて
まじらむとてはくまのりてはくまのりて
日あかりの程はくまのりてはくまのりて

—とあがられぬもあはれなり大方
—に院のうらみはくまのりてはくまのりて
はくまのりてはくまのりてはくまのりて
とまじらむとてはくまのりてはくまのりて
はくまのりてはくまのりてはくまのりて
な—の肉体的のあはれなりてはくまのりて
とまじらむとてはくまのりてはくまのりて
まじらむとてはくまのりてはくまのりて
日あかりの程はくまのりてはくまのりて

く——として侍大納言報房乃西の御りあり。あま
くはらしくよおし——まはなびあひのりそ城
とあがりしまごがひてきよあまをかりおかせし
ま——まあるままだおのりまのり人海のりて本院
の二乃まよはしあやういひけやまききき——め務
ど。つふはせん——そ七月廿ありは皇太子乃節しを
をこれのち陣乃ざりし——して持明院教
——人ともまのち院の勢よ——してろくさどは
おはし乃事るまどあし——してあて——八月
——かりて陽徳門院の土直門あいの院をへ約誓い
——めあり歩のまある海司あま——します。つらにや

とに世乃ちとあひきき——めと入道乃ま女院など
乃西にれうらうは——してのち院新院へ
と門の車よあてまつりくはさきまらき——勢
給ふ約誓ち東乃院にりての棟門よ車とあて
中門まそあん——とあまこつち勢きまよ
あまはくゆむくやまきひのふうのく——びあり。十
八ぶらうあやわ——まはらんまはらうを院の教
上人などおりくはらうのまら。花むけきまら。の地
とまともあ——あまはらる世乃ち——ひ一代まあか
あま——して中勢の善良親王ときまを極——うら内ふ
酒の井下——してまら勢あま。じ月乃十六日其勢

